

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520228  
 研究課題名（和文） ヨーロッパ近代における「文化危機」の内実と母権論問題の解明  
 研究課題名（英文） Solution of the truth of the “culture-crisis” in the modern-Europe and the problem of maternal rights  
 研究代表者  
 谷本 慎介 (TANIMOTO SHINSUKE)  
 神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授  
 研究者番号：10114555

研究成果の概要（和文）：19 世紀末のヨーロッパにおいてとりわけ「文化危機」意識が高まったが、本研究はまずブルクハルト、バッハオーフェン、ニーチェ、ワーグナーを中心とするスイス・バーゼル文化人サークルがショーペンハウアー哲学への共感によって結ばれていたことを明示した。つぎに当時は無名だったバッハオーフェンの「母権論」などの著作から、ニーチェが自らの思想の核心部分を受容した実態を解明し、「母権論」問題が時代精神の深層にあったことを明示した。

研究成果の概要（英文）：While the “culture-crisis” consciousness has heightened particularly in Europe during the end of the 19<sup>th</sup> century, this study has first showed, that the intellectual-circle in Basel of Switzerland -in the center stand Burckhardt, Bachofen, Nietzsche and Wagner- were bound together by sympathy with the philosophy of Schopenhauer. Then this study has certified, that Nietzsche has accepted the core of his philosophy from the writings by Bachofen, who was still unknown, such as “maternal rights” and that the problem of “maternal rights” was lying in the depth of the spirit of the age.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系

キーワード：バッハオーフェン、ニーチェ、ワーグナー、ショーペンハウアー、母権論、バーゼル・サークル

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は平成 15-18 年度科研・基盤(C)「ワーグナー、ニーチェ、ヘリゲルにおける

文化危機の自覚とその克服過程の比較検証」から必然的に導き出された。この先行研究において私は表題に掲げた 3 名のドイツ人の

「文化危機」意識の内実と、危機克服のプロセスを明示した。

(2) 発端は 2003(平成 15)年 9 月にドイツ・バイロイトで開催された国際コロキウム(統一テーマは「東アジア文化の受容」)における私の研究発表(題目は「オイゲン・ヘリゲルによる東アジア文化の発見と受容」)にあった。わたしはこの発表でヘリゲルが来日したのとほぼ同時期にインドへ留学したミルチャ・エリアーデに注目し、両者のアジア文化へのアプローチを比較した。

(3) 先行研究の遂行プロセスにおいて、私は二つの矛盾し合う命題を提起した。命題 1: 「人は生きるために神(神的存在)を絶対に必要とする」。命題 2: 「人は生きるために神を絶対に殺さなければならない」。この 2 つの、それ自体としては真である矛盾しあう命題が、近代ヨーロッパ人に課せられたアポリアだという認識に達した。

(4) さらにミルチャ・エリアーデの「錬金術師は初期の化学よりもはるかに多くのものを近代社会に遺贈した。それは自然の変成への信仰と、時間を制御しようとする野望にほかならない。錬金術師の夢の追求こそが 19 世紀のドグマであり、このドグマとは、人間の真の使命は自然を変形し改良して、その主人になることである」という指摘から、自然を生きたもの、<生成>の相のもとに見る立場は、前近代的な錬金術師たちのみが固執した過去のものではないことを知らされた。自然を<生成>の相のもとに見る自然観がヨーロッパ近代の産業革命を生み出したという認識は、日本で一般的に信じられている近代ヨーロッパ観と著しく異なっている。例えば梅原猛は『神殺しの日本——反時代的密語』(2006、朝日新聞社)の中で、「デカルトに始まる近代ヨーロッパの中で西洋の哲学は、神を棚上げして世界の中心に理性をもつ人間をおく。これが近代科学技術文明の土台をなす哲学となったが、この文明によって環境破壊が起こった」と断定したが、精神と物質に基づく画一的かつ安易な自然観のみで近代ヨーロッパ文化を片づけることはあまりにもドグマティックな力業であり、真のヨーロッパ像を捉えそこなう原因になりうる。このような画一的かつ誤謬をはらんだヨーロッパ観が横行している日本の現状を、真正なヨーロッパ観によって打破する必要性を痛感した。

(5) 先行研究において、ワーグナーの掲げた「ドラマ」=総合芸術をトータル=全なるものの模索として捉え、ニーチェの描いた狂人による「神の殺害」をヨーロッパ人の心を表

層を覆う正統派キリスト教の「絶対神」を殺すことによる心の深層の模索として捉えた。心の深淵をのぞき見ることは危険をとまなうのであり、ヘリゲルは「全なるもの」の模索を 20 世紀前半の日本において禅と弓術の実践によって体現した。ヘリゲルの実践については滞在地の仙台に赴いて、とくに弓術の実践にかかわる貴重な資料を得て、彼の心の内実を明らかにした。

## 2. 研究の目的

(1) ブルクハルト、バツハオーフェン、ニーチェ、ワーグナーを中心とする<バーゼル・サークル>の実態究明。バーゼル大学の教授たちと数十キロはなれたトリーブシェン在住のワーグナーは、彼ら自身が名付けたわけではないが<バーゼル・サークル>ともいうべき知識人グループを形成していた。上山安敏はバーゼルの知識人たちと、ヘーゲルを中心とするベルリンのグループを対峙させた。当時スイスの小都市バーゼルの大学はただか百人あまりの学生しかいなかったが、国力を飛躍的に高めつつあったプロシヤの首都ベルリン大学の教授たちに匹敵する業績と影響力を持っていた。そのような環境のなかで、20 代半ばで教授に抜擢されたニーチェは基本的に年長者たちが獲得した知見を吸収する立場にあった。彼のギリシャ文化理解がブルクハルトのギリシャ観なしにありえないことはつとに指摘されてきた。しかし彼はバツハオーフェンとも家族ぐるみの交友があったにもかかわらず、遺された著作や手記にはバツハオーフェンの名はほとんど記されていない。これは謎ともいうべき事実だが、その理由を指摘、解明した先例はない。ニーチェはバツハオーフェンから何を得たのか、という問題を核心とする<バーゼル・サークル>の実態を明らかにできれば、当時の文化危機の内実と、母権論問題の明確な位置づけができるはずである。

(2) 1920 年代に集中する、ヨーロッパ人自身による 19 世紀の母権論問題へのアプローチの実態究明。ヨーロッパ世紀末の「文化危機」の帰結が第 1 次世界大戦だったとみなせるが、大戦後、一つの文化運動のように母権論研究がなされたなかで、L. クラーゲスのバツハオーフェン研究、ユングの錬金術研究に焦点を当てて、当時の母権論への問題意識に迫る。それによって複眼的に 19 世紀の「文化危機」の実相が照射できると考えられる。クラーゲス、ユングの他、ミルチャ・エリアーデ、ガストン・バシュラールのアプローチも可能ならば取り上げ、さらにフロイトの『トーテムとタブー』において提起された<親殺し>と<神殺し>の文化における必然性の意味付けをも視野において、19 世紀の母

権論問題に核心に迫る。

(3) ニーチェの『ツァラトストラかく語りき』を母権論問題の帰結として読み解く方法の可能性究明。ニーチェの主著ともみなせる本書の評価は、欧米においても日本においても未だに定まっていない。否定的評価の急先鋒はトーマス・マンだが、一方ユングは<分析心理学的>アプローチによって、本書を錬金術のプロセスの深層を解明するものとして積極的に評価した。フロイトの「オイディプス・コンプレックス」も本書の解説にまちがいなく寄与する。ニーチェはたんに「神は死んだ」と言ったのではなく、われわれが「神を殺した」と言ったのであり、二つの表現の差は限りなく大きい。フロイトは神の殺害をと父親殺しをシノニムとして捉え、これらの殺害こそが文化生成の根源だとまで断言した。本書の解説に当って、バッハオーフェンの<母権論>のみならず、ユングやフロイトの見解もあわせて適用できるかどうかの可能性を見極める。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は文献研究であり、緻密なテキスト・クリティークを出発点とする。テキスト選択と精査を誤ることは、文献解説の致命的間違いに直結する。

(2) 信頼するに足る文献の選別に当って、私の長年にわたる研究パートナーであるドイツ・バイロイトのワグナー博物館前館長のマンフレート・エーガー博士の助言を仰ぐ。私はこれまで同博士のワグナーやニーチェにかんする幾多のテキストを翻訳してきたが、同時に研究方法についても有益な示唆、助言を得てきた。本研究においても、日本において判断がつかかねる場合は、同博士の信頼できる判断を採用する予定である。

### 4. 研究成果

(1) ニーチェとワグナーの関係について、従来のオーソドックスな見解を打破する事実を提示した。ニーチェがワグナーから離反した経緯については、日本のみならずドイツにおいても画一的な見解が学会の主流になっていて、ニーチェの第2論文集『反時代的考察』と第3論文集『人間的な、あまりに人間的な』の間で明確に区別されるという公式的見解が自明のように思われている。上記のマンフレート・エーガー博士はそうした画一的な見方の誤りを自著のなかで明確に証明したが、氏が在野の研究者であり、アカデミズムの中にいないという理由で、ドイツにおいても否定的に評価されている。しかし私はエーガー博士が厳密なテキスト・クリティークに基づいて打ち出したニーチェーワ

グナー関係についての見解を積極的に推し進めて、ニーチェは表面的なワグナー批判のことばの深層で、結局ワグナーの後継者たらんとした意思を明確に提起した。1883年2月にワグナーがヴェネチアで死去した直後、ニーチェはワグナーが自作の上演のために開催したバイロイト祝祭劇の主宰者として名乗りをあげたのであり、この事實はなによりもそのことを明示している。ニーチェのこの後継者としての名乗りを、友人宛の書簡のなかで吐露しているのだが、現在わが国で入手可能な翻訳の書簡集では、この名乗りの部分は削除されている。これは翻訳（「ちくま文庫」版）が1970年代に出版されたシュレヒタ版に基づいていて、この版がニーチェの妹エリーザベトがさまざまに手を加えた実態をそのまま掲載しているために生じた不具合である。このような実態ではニーチェの実像にはどうも迫れないのであり、日本語の翻訳で「ニーチェ研究」をしているかぎり、誤謬を正すことは不可能である。ニーチェの実像に迫るためには正確なテキスト・クリティークが大前提にあることの一例だが、私は文献精査の上で、ニーチェとワグナーの関係の正確な捉え方について、本研究において一石を投じた。

(2) ブルクハルト、バッハオーフェン、ニーチェ、ワグナーを中心とする<バーゼル・サークル>の知識人たちは、ショーペンハウアー哲学への共鳴という絆によって結ばれていた事実を明示した。従来、例えば上山安敏氏や大部のニーチェ伝の著者ヤンツは、ベルリンとバーゼルを対峙させることによって、知識人の傾向の対立、対比は提起した。たとえばバーゼルのニーチェは『悲劇の誕生』でディオニュソス対アポロンという大胆な二項対立を打ち出したが、ベルリンのヴィラモーヴィッツは文献学的立場からそうした二項対立を否定した。ニーチェとヴィラモーヴィッツの対立は方法論の対立と見なせる。しかし従来は、ベルリン対バーゼルの対立を、ヘーゲル対ショーペンハウアーの対立としては捉えられてこなかった。私はバーゼル・サークルの人たちの言説を精査することによって、ショーペンハウアーこそがキーワード（キーパーソン）であることを明示した。さらに従来は、ニーチェとブルクハルトの関係について、はるかに年長のブルクハルトからニーチェはギリシャ観などにおいて一方的に受容したと見られてきたが、このような画一的な見方も修正しなければならない根拠を示した。例えばニーチェは『悲劇の誕生』の中でペシミスティックなギリシャ人像を提起したが、これほど大胆なギリシャ人観をブルクハルトが明確に抱いていたかどうかは断言できず、むしろブルクハルトは自分よ

りはるかに若いニーチェの大胆な仮説に刺激されて、大部の『ギリシャ文化史』のなかでニーチェの仮説を追認する叙述を展開した実態を明示した。

(3) ニーチェは『悲劇の誕生』のなかで「ディオニュソス的世界観」を打ち立てたが、そのさいバッハオーフェンの「バックス的世界観」を全面的に受容した実態を明示した。従来、ニーチェが哲学者としての処女作『悲劇の誕生』を著述、出版するにあたってワグナーがきわめて大きな役割を果たしたことは指摘されてきた。しかしバッハオーフェンの関与については明確に論じられることはなかった。例えばドイツで2005年から出版されている『ニーチェ辞典』は、重要概念を精選して解説するというスタイルで、「ディオニュソス的・アポロンの」という項目は約40ページにわたってこの概念をニーチェが用いた経緯を解説している。そこでバッハオーフェンにも言及されているが、不思議なことにバッハオーフェンの「バックス的世界観」という表現にはまったく触れられていない。バッハオーフェンは1859年に刊行した『古代人の墓碑象徴に関する試論』の第3章でギリシャ人の「バックス的世界観」を提起した。「プロシテラオスはトロイア戦争で最初に戦死を遂げ、ラオダメイアの愛によって三時間だけ冥府から解放されたが、死者たちの案内役ヘルメスは、冷酷な掟に従ってたちまち彼を冥府に連れ戻した。この神話の理念は、バックス的世界観と完全に一致する。」このバッハオーフェンによる「バックス的世界観」を、ニーチェは「ディオニュソス的世界観」と言い変えた。もしもバッハオーフェンが先に「ディオニュソス的世界観」と言っていたら、ニーチェはきっと「バックス的世界観」と言い変えていただろう。引用したプロシテラオスのいきさつをニーチェは自分の作品ではアキレスの逸話に代えて用いた。エーガー博士はニーチェの「受容の天才」としての実態を暴露したが、近著の『ニーチェのパイロイト受難劇』では「盗みの天才」という仮説を打ち立てた。それは主にニーチェがワグナー批判の武器としてハンスリックの言葉を盗用した事実を立証することによって建てられた仮説だが、『悲劇の誕生』の最重要概念「ディオニュソス的世界観」もバッハオーフェンの盗用といいうる実態を、私は明示した。ニーチェが本書を著述、出版した1870～72年当時はバッハオーフェンはまだ無名の学者にすぎず、『母権論』をはじめとする諸著作は私家版で出されたのみで、一般の目には触れることがなかった。しかしニーチェは「バーゼル・サークル」における交際を通じてバッハオーフェンの諸著作を間違いなく読んでいた。こうした経緯からニ

ーチェの仮説のオリジナリティがもてはやされてきたが、バッハオーフェンの一次文献の精査によって、ニーチェの受容、盗用の実態がはじめて白日の下にさらされた。

だがニーチェがバッハオーフェンを「受容」した事実にかんして、重要なことは「受容」という事実そのものではなく、「受容」の内実を見極めることである。その場合のキーワードは「母権論」にほかならない。この点については論証の課程にあって、結論は出ていないので、今後の課題として残されている。

(4) ワグナー、ニーチェ、アドルフ研究者として高名な三光長治について、近著『晩年の思想』を中心として、氏のワグナー、ニーチェ研究の方法論、意義について論じ、問題点を指摘した。三光氏は論文を日本語のみで書き、ドイツ語等には翻訳されていないために欧米では正当に評価されていないが、その業績がいかんワグナーやニーチェ研究に寄与しているかを示した。同時に氏の、とくにワグナー解釈の変遷において、視点の移行が最終的にどの地点に到達するのかが明確でない事実を指摘して、将来への展望と希望も示した。

(5) 研究目的の3番目に掲げたニーチェの『ツァラトゥストラかく語りき』の母権論をキーワードとする解説は、目下進行中であり、まだ結論に達していない。一定の結論が得られしだい、論文を執筆する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 谷本慎介、「ニーチェとディオニュソス——ニーチェのバッハオーフェン受容」神戸大学国際文化学研究所紀要、査読なし、第31号、2008、1-29
- ② 谷本慎介、「三光長治論——『晩年の思想』を中心に——」『青銅時代』(冥草舎)、査読なし、第48号、2008、80-88

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

- ① 谷本慎介、「ワグナー、ニーチェ、ヘリゲルにおける文化危機の自覚とその克服過程の比較検証」神戸大学、2007、71

〔その他〕

ホームページ等：開設せず

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷本 慎介 (TANIMOTO SHINSUKE)  
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授  
研究者番号：10114555

(2) 研究分担者：なし

(3) 連携研究者：なし